

特32

562

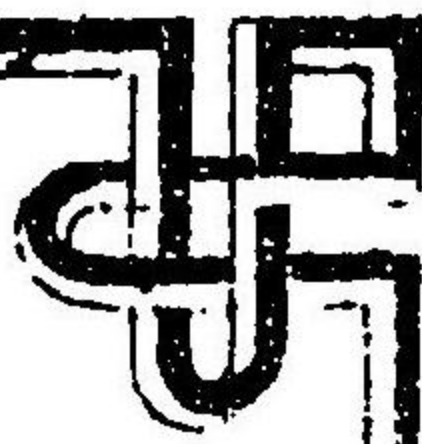
事

村井靜馬編輯

明治太平記

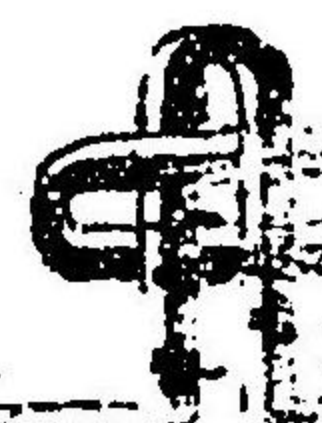
廿四編

上



村井靜馬編輯

鮮齋永濯畫

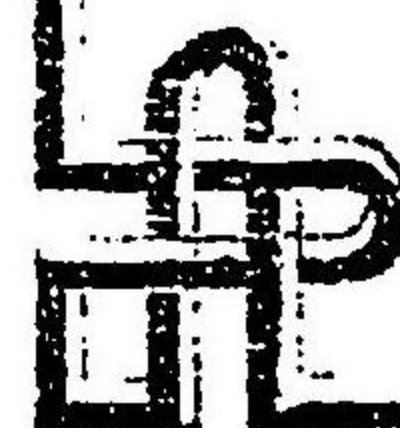


官許

事明治太平記全

東京書肆

延壽堂藏版



治よ居て亂を遺れぬたは國と固め一門場と明治太平記と
 題せし史を延壽堂の壽梓よふんやふ這史まよふ太平
 鼓腹の奇表紙よりて四十八巻を閲する時へ明治の明治たる
 事を知る可明治等敷史の編綴長くハ演を明治開化よ
 手採迅速縮綴を寸燭未残千載過と吟ぜし甌北の句調よ
 似たり右卷左盃ぞ今此時角像海老の具足者火もマンテリ
 焼は骨折らむを銃炮と呼ぶ河豚汁より明治まよるのかはし
 合まぐ獨酌てめまづく讀書といの本よ太平喜樂る世や
 と鼓腹よふ得手なる狸雄何みも治乱毛作者が耻と染
 たる筆よ任せて黒りとらしく明治のつと序を

明治十四年第一月

柳水亭種清

野村胡堂馬編輯

鮮齋永濯畫

官事明治太平記全

東京書肆 延壽堂出版

治よ居て亂を遺れぬたは國と固り一門場と明治太平記と
 題せし史を延壽堂の壽梓よふんゆふ這史まよふ太平
 鼓腹の奇表紙よりて四十八巻を閲する時ハ明治の明治たる
 事を知るハ明治等敷史の編綴長くハ演を明治開化よ
 手採迅速縮綴と寸燭未残千載過と吟ぜし甌北の句調よ
 似たり右巻左盃を今此時角像海老の具足者ハマンテリ
 焼骨折らむ鏢炮と呼ぶ河豚汁より明治まよふのかはし
 合々獨酌てめまぐろ讀書よん本よ太平喜樂なせや
 と鼓腹よん得手なる狸雄何みも治乱毛作者が耻と染
 筆を任せて黒りとらしく明治の序を

明治十四年第一月

柳水亭種清



明治十四年第一月

二

野津少將

川路少將



曾我少將



財源及清言 七位 綱目一



財源及清言 七位 綱目一



鹿兒島米倉の戦ひ

卷之弍 ちとちと城山の攻撃後

議まらるゝ終る

城山攻撃の部署既定

卷之貳 ちとちとはじまらるゝ西南平

定まらるゝ終る

明治太平記廿四編卷之一

東京 村井静馬著

其時米倉より海兵を能く戦ふとつとも其
數百名より過ぎぬ新選旅團へ生兵よりて戦ひよ
慣まざれば據るゝ旧米倉より入て死守を賊火と
放ちてあまは攻るとつとも倉の中より唧筒を
貯へ置たすれを之を以て焼く能くは對戦し
て九月二日の日中より至る初め賊の乱入するや

伊東少將直ち一人旅して三好少將益満大尉
 報せしむ益満大尉先づ報死得てその二中隊と
 以て鹿兒島より歸り且つ人と三好少將の陣を遣
 る少將ハ鹿兒島の警報を聞て直ち其兵を廻
 さんとの外候の兵来りて賊の近き邊りの野
 在る候報あるに會ふ因て急に進んで其中央と
 衝ておはせ候中斷せらるる乃ち賊の中軍より劇
 く戦ふことあり何とも力めたり後ハ聞く俘虜の

と云ふ処ハ據まば此役ハ逸見十郎太頭部ハ重
 傷を受くと後城山陥るに及んで病中ハ死す
 賊の後軍陸續として来り援ひく左右ハ相應
 ありけるに我が兵遂に如何ともなまると
 る一戦ひと接ゆると半夜に至りて戦ひを収め
 道成右翼ハ轉じて重富ハ退く會々阿武中佐兵
 と以て横川より来り沖原大尉ハ一大隊を以て
 海路細島より至る因て小部署を定め二人と

てかのく其兵を以て帶迫し入らむ是に於て
 始めて山口少佐の兵と連絡を續ひて野崎中佐
 の兵もまた連絡を賊の募りし應じて鹿兒島の
 城下に入らんとする者路を止めり絶えり横
 川栗野吉田等ハ別働第二旅團第三方面の兵及
 び第一旅團大島少佐あまたと警備を二日賊兵ハ
 私学校縣廳をかび二の丸等と根城として新選
 旅團より奪ひしる大砲四門臼砲六門とりり

米倉の四方を圍んで攻撃し我兵能く防ぎ賊
 軍の運輸局に入りし残り餘る所の弾薬を奪を
 せんとは是時沖よりける所の春日艦遙々小
 とし望んで弾丸を打ち込め之を焼く此日午
 前四時河村参軍大山少將吉村少佐の一大隊と
 率ゐて海路細島より至る参軍の一行いまだ鹿
 兒島の陥る候あらず此に至りてをトめて見る
 城下の再築の家屋を一團の烈火と化して暁

日清戦争 其の終巻一

六

鹿^ろ兒^こ島^ま
城^{しろ}下^{した}再^{また}
築^{つく}の^の家^{いえ}
屋^やの^の再^{また}
焼^やる^る
い



天と雫一火光蒼天と焚く大小の砲声の雷名の
如く呐喊の声の山岳と撼し喇叭のひびきたる遠
近の鳴渡り忽ち惨淡たる修羅場と現出をその
容易の上陸にがたを以て先づ指揮して懸軍
孤立の米倉の兵と援けあたりし大砲発射撃一
て賊勢と殺ぎ吉村少佐一大隊および別働第二
の斥候兵と甲突川の南の岸天保山辺より上陸
して甲突川よりよりと進み入らむ是に於て

大門口の賊且つ戦ひ且つ退く時は米倉の兵
突出して旧作支場を儲る弾薬を焼き再び米
倉に突入る天保山に上陸する所の我軍の夜
に及んで米倉の兵と連絡を此日春日龍驤の二
艦より絶えぬ砲撃を是より先き二十六日の暴
風雨に鹿兒島湾内の船多く破壊し龍驤艦は遂
に祇園洲に打揚らるとして器械の軍用を失ふ是に
至りて浮臺場となりて賊地を射撃して其用を

為さることあり奇ありをや此日三好少將諸將校
 と相議して別働第一旅團沖原大尉の兵四中隊
 少將の兵二十三中隊と合して明晨鹿兒島に進
 と入るの部署と定めるときは河村参軍も告ぐ
 重富も在りて屯する所は兵の午前三時を以て
 出發しその前線に進めるもの各この時限も
 應じて同時に鹿兒島に入ると測りて發程せし
 む三日第二旅團の阿武野崎山口三佐官として

その兵を指揮せしめ新選旅團の現兵一中隊は
 と其のいづれも點綴し吉野街道および海岸より
 兵と三道よりうちて沖原大尉の兵と併進し磯
 山催馬樂山多賀山の背後より衝て入る賊も
 我が塁を據りて拒ぎ戦ふ多賀山祇園洲の邊よ
 り大砲を續け發ち力を尽して拒ぐといふも
 重富口の官軍とことさら奮戦勇闘して磯山と
 抜き多賀山と奪ひ催馬樂山とおとしいまゝ遠

賊私学校に追ひ込みて米倉の官軍と連絡
取通さるゝを得たり是に於て鹿兒島市中の
過半我有り復し賊に退ひて城山に據りて高き
地を占めて絶えぬ射撃をなす我兵の通行する
もの庇陰なき処に駈足よて往來を夜に入りて
重富より來り襲ふの兵に嚴しく各山を守り米
倉の兵および吉村少佐の兵に哨兵と市中に張
る而して終夜私学校に火矢を放つ賊兵凡そ

三百人殺しと叩き迂回して廣馬場橋を過ぎて背
後より米倉を襲ふんとは橋のやとりの哨兵暗
号を奉て誰なりやと問ふ賊應ふると能く
小銃一発して忽ち短刀相接す我兵相聚りて
銃鎗を以てむらぐを衝き直ち賊兵數十名と
斃す餘賊屍を棄て私学校へ入る屍中には異常な
るものありあはれ知るものよ問へを賊將貴島
清みりとりり四日中村中佐長谷川中佐の兵

河下不河

十一



河下不河

十一

廣馬場橋
 賊兵夜
 撃走

入吉口より城山の背後より因之地を分て
攻守線と張り既ふして三浦少將および別働隊
一旅團の先鋒岡澤中佐等続きましていさる相連絡
して賊地茂田む兵負いも足らむ伊集院街道
の一面をかむむおと能く六日熊本鎮臺の先
鋒樺山中佐兵とゆたわく至る是よかいてまへ
この田を全く成る此日中津の賊魁増田宋太郎
と捕らふをトめ三日の夜貴島と俱に夜討して

事就らむ敗れて走るよ及んで途に迷ひて帰る
おと賊得お白晝に橋の下に隠れ伏し夜に入
を彷徨して帰る路と索む我が哨線嚴ししてそ
の便りを得お此日第三旅團兵の為よ捕へられ
て縛よ就くとりよ此時に當りて賊ハ依然と
城山の堅壁重壘よりより射撃するのよ遂に
出て戦ふおとふ官軍の日々守線よ堅牢な
る重壁を築きて竹柵とわぐらはみと三四里よ

いささ宛然として万里の長城と現出を而して
 壁中より発つととろの巨礮の萬雷の一天は夷
 く如く山岳と撼う海濤と湧まその包と囲む
 の部署の別働第一旅團吉村少佐の一大隊ハ石
 燈籠道辺新選旅團二大隊ハ米倉別働第一沖原
 大尉の一大隊ハ琉球館の背後第二旅團二十中
 隊ハ岩崎口別働第二中村中佐の八中隊ハ城山
 の背後第一旅團長谷川大島の十中隊ハ武山の

前面熊本鎮臺樺山中佐の二大隊ハ武村より西
 田橋第三旅團十七中隊ハ西田橋より鷹見馬場
 と守りて吉村少佐の兵は接ま其他第四旅團坂
 本少佐の三中隊同砲兵一分隊ありと賊地狹網
 羅して蟻穴の隙を八月山縣參軍鹿兒島より
 十三日賊巢田二の九より白旗をかゝ立て第
 三旅團の哨線より出るものありあまを誰ありと
 見よを從二位前左大臣島津久光の家令家扶等

男女六十餘人ありとあり此日安藤中警視則命
 巡査一千五百人殺率わて鹿兒島より同日
 賊の募兵掛り小倉啓助を捕ふあり其鞠まれを
 り深見源二郎ハ瓶島に潜伏して兵と拳んと
 を大砲二門と所持をとりり又り賊兵城下を
 進入の時ハ一千五百人ありと又り賊徒の死
 死決り約と結ぶの者飲肥の清滝邊に二百名
 潜伏を佐土原に殘賊ありり宮崎と突んとはと

おとろふ桐野利秋が約まる所とりり又募兵掛
 り肥後壯之助等と捕ふ此時既ハ賊魁重圍に陥
 りり勢ひ日々緊縮し日夜砲撃せりり後以
 て覆巢竟ハ完卵なく漸く岩崎谷の穴の中にお
 りり飛來る弾丸を避るのとおとろふりり糧食
 りり勿論弾薬も大に乏し様子見えりり二
 十一日賊山野田一輔河野主一郎我が哨兵線に
 りりおとろふを本營に送致してその何故に至る

山野田
河野二人
降伏



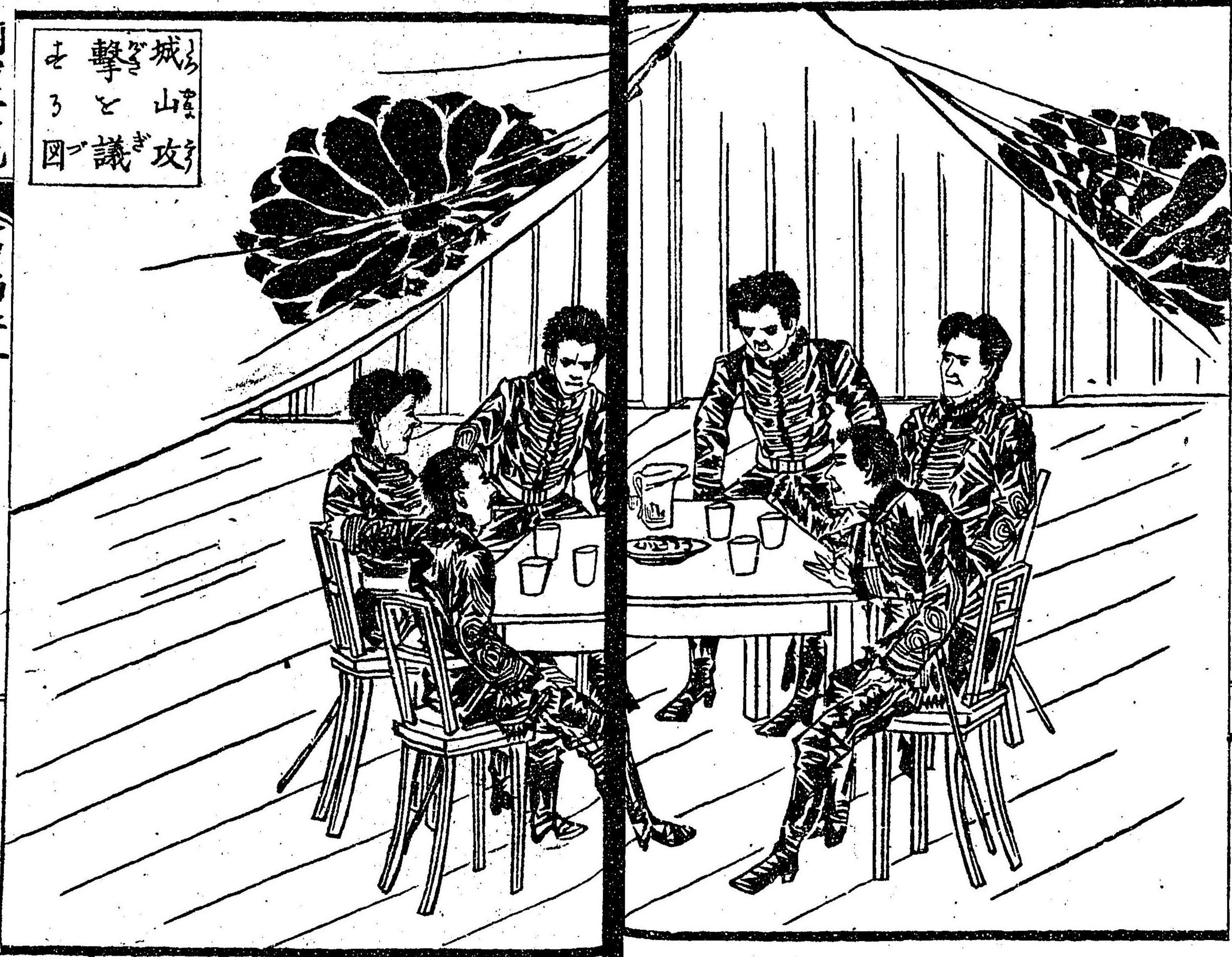
を問へむ曰く法廷よついで義奉を辨せんのと
 と河村参軍鞠問敷回して二人遂に罪を伏せ因
 て主一郎と退り一輔をうらら西郷隆盛は
 報ぜしむ去るに臨んで山縣参軍木留より西
 郷に贈るとらるの私書達せざるあはれ思ひ其
 副をりさしむ西郷ハ山縣の書を得てしりき
 見て愁然として曰く我は山縣参軍は昔々びと
 二十三日西参軍九少將議して城山を攻撃する

の約成立ち及び攻撃の部署を定む城山攻撃の
 立約よいなく各軍合圍と完く備するの後ハ素
 より攻撃の手段をふさぐる筈なり然るども
 此役ハ圍を成守るを一と一攻めを破るを二と
 せざるあはれを得ざる後以てその攻撃をなすも
 おのづから尋常の攻撃と殊あらざるなり成得
 る因る攻撃の約束を立るあはれ左のとて此の
 攻撃ハ各軍より特は攻撃兵を簡び抜き出して

まま紙擔任せしむる紙以て他の合用兵を一
 その防禦線を厳しく守るを以て務めと一攻撃
 兵の進退を因てその位置を交換するあり紙得
 び簡び抜くところの攻撃兵の各個自づろ任
 苦戦死闘の急ゆるも後軍の應援紙ためのむべ
 らむ攻撃兵より人ごとよ百五十發乃至二百發紙
 負ひしめ着目の攻撃点と占め領するまでを弾
 藥その他の運搬をふはさる紙ゆるさる紙攻撃兵

その目的と達するまとな能をばしと却退し賊兵
 まよよ尾し急し撃て突く出んとする時ハ合團
 兵を彼我とすのうばま紙銃撃し以て賊徒と
 卻ぞく登し但し我退ぞく兵を防禦線内よ入る
 り賊徒の為し尾入せらるるの恐しふたあり紙
 確と認むる場合よ於るハ臨機の處置ゆるべし
 攻撃の事情より攻撃兵より應援と乞ふとを
 軍團の号令ゆるよあらざれを決して他の部よ

城を撃つ
 嶺と
 攻め議
 図



まふざりよその守り候捨て赴き援ふべし
若し又賊の精銳我が合田兵の一部と衝突する
おと有るとたを甲乙たのひに應援してまは候
打ち破るんまきと當然とりんとも自己の防禦と
しと脆弱よりてつゝめざるあは候要は各軍司
令長官のその擔任合田線の中央のりくる便宜
の地は出張して始終戦ひの状と注視し合田兵
のさし図とあまべし攻撃兵とあくるその目的

を達まらんとも合田の各軍の軍團の号令候り
るよゆらざれをその困を解く可くは攻撃
部署を定めたいをく此の攻撃の一よき候は決
定まらぬの攻撃立約の主旨は基き各旅團鎮臺
よりかのく一中隊半乃至二中隊の兵と簡抜し
のりさ攻撃兵を充て又攻城砲隊司令長官大山
少将ハその砲隊を以て大を助けともは攻撃
候かきむべしその部署とさむむると左の如

一 攻城砲隊を先づ浄光明寺山又備ふる処の大
 砲と以て城山の東北面又突出せる賊壘と的登
 破壊まじりとす

明治太平記廿四編卷上終

明治太平記

